

2016年5月28日 2016年春期第一回5月14日『ヴェニスの商人』復習

前回、4月30日を春期講座の一回目と申しましたが、神父様のお考えに従いまして、初回の4月30日はシェイクスピア没後400年記念特別講演とし、前回5月14日の『ヴェニスの商人』を2016年度春期講座の第一回目といたします。従いまして、本日は、春期講座の第二回となります。回数に関する変更、何卒ご了解ください。

『ヴェニスの商人』以前の喜劇には、『間違いの喜劇』のルシアーナ、『ヴェローナの二紳士』のシルヴィア、『恋の骨折り損』のフランス王女のように、聖母マリアのような徳高い女主人公が登場しました。けれども、作品としての完成度を考慮すると、『ヴェニスの商人』こそ、シェイクスピアの最初の偉大な劇だとのこと説明がございました。『ヴェニスの商人』以降、『空騒ぎ』、『お気に召すまま』、『十二夜』が創作されます。John Dover Wilson (1881-1969) の著書 *Shakespeare's Happy Comedies* (1962) のタイトルから、これらの喜劇は “happy comedies” と総称されることが多くございます。これらの喜劇を創作中、シェイクスピアは、問題劇『ハムレット』以降の悲劇が念頭にあったため、内容的には “happy comedies” ではないと神父様は解説なさいました。

では、『ヴェニスの商人』は、なぜ偉大な劇なのでしょう？神父様は、『ヴェニスの商人』以前の喜劇とは違い、単なる喜劇ではなく悲劇の要素を含む劇だからだとおっしゃいました。第一幕第一場で登場するヴェニスの商人アントーニオは憂鬱そのもの。その原因は、親友バッサーニオのポーシャへの求婚でした。第二場では、ベルモントのポーシャが、父の遺言に縛られて結婚相手を自分の意思で選ぶことができない憂鬱を吐露します。第三場にはユダヤ人の高利貸シャイロックが登場し、キリスト教徒とユダヤ人との対立のテーマが浮上しました。

アントーニオは、バッサーニオの求婚費用を用立てるために、高利貸シャイロックに三千ダカットの借金を願います。シャイロックはアントーニオにおもねりながら、高利貸の商売の邪魔をし、ユダヤ人を差別するキリスト教徒アントーニオへの怨念と憎悪をぶつけます。期日までに三千ダカットの借金が返済できない場合にはアントーニオの肉一ポンドを切り取るという条件で契約は成立しました。

シェイクスピアの劇は、主筋と脇筋の構成をとるのが一般的です。ところが、『ヴェニスの商人』は、『リア王』同様、「肉一ポンド」の筋と「バッサーニオのポーシャへの求婚」の二つの主筋が存在します。二つの筋を結ぶ人物こそバッサーニオです。ベルモントで、バッサーニオが金、銀、鉛の三つの箱から正しい箱を選び、ポーシャを妻にしました。その喜びの瞬間に、アントーニオが借金を返済できず命の危機に直面しているとの知らせが届き、場面はヴェニスへと移ります。

第四幕一場で、シャイロックは憎悪するキリスト教徒アントーニオの命を法廷で奪う所存です。弁護士に男装したポーシャは、シャイロックの言い分を認めた上で、新約的慈悲を説きます。旧約的正義を断固求めるシャイロックは、断固として応じません。シェイクスピアは、人種差別の被害者シャイロックの言い分と同時に、アントーニオの命を合法的に狙う復讐者シャイロックの姿を描

いています。シェイクスピアは、シャイロックに一方的に肩入れしている訳でも、反ユダヤ人の立場に立っている訳でもありません。シェイクスピアは、シャイロックを一人の人間として描いているのです。

ポーシャは、法律の文言を盾に取る教条主義的なシャイロックに対抗し、肉一ポンドを切る際には、文言通りの正確な重さの肉を切り取り、且つ、血を一滴も流さないよう命じます。契約書とヴェニス法の法を盾に、シャイロックを追い詰め、ヴェニス人の命を狙った咎で罪に問いました。ユダヤ人に改宗を求めるのは、ポーシャではなく、シャイロックに慈悲を示すアントーニオですが、キリスト教への改宗を強制する個所は問題視されています。ユダヤ人シャイロックが、無慈悲な悪人なのか、あるいは、悲劇の主人公なのかが問題なのです。

『ヴェニスの商人』の材源の一部となったクリストファー・マーロー (1564-93) の『マルタ島のユダヤ人』に神父様が言及されましたので、『マルタ島のユダヤ人』の解説を少し付け加えることにいたしましょう。マーローはシェイクスピアと同年で、ケンブリッジ大学修士課程を修了した劇作家です。『マルタ島のユダヤ人』は 1590 年頃、ローズ座 (薔薇座) で上演され、大変人気を博しました。主人公はマルタ島の大富豪のユダヤ人バラバスです。一人娘の命よりも財産を大事にする強欲ぶりを発揮し、滑稽味を感じさせる程の極悪非道な悪役タイプです。同じユダヤ人でも、シェイクスピアが描いた人間性を感じさせるシャイロックとは違います。

興味深い点は、ユダヤ人バラバスは、宗教を理由に自分の全財産を没収したキリスト教徒に復讐するために、イスラム教徒のトルコ人とキリスト教徒を出し抜きます。ところが、最後には、キリスト教徒の計略に落ちて釜茹でにされ、煮殺されてしまいました。ユダヤ人の大悪人バラバスよりも、キリスト教徒の方が、マキアヴェリ主義者として一枚上手だったという諷刺の効いた皮肉な結末です。無神論者といわれたマーローらしい作品といえるでしょう。スパイだったマーローは、1593 年、ロンドン郊外で暗殺されています。

1594 年 6 月、エリザベス一世の主治医ユダヤ人ロペスが女王毒殺を計画した罪で処刑される事件があり、反ユダヤ人感情が高まりました。この風潮に合わせてように、1594 年 6 月に、『マルタ島のユダヤ人』が四回も上演され、劇場は大入りとなったのです。シェイクスピアは、このような状況下でイタリアの小説を材源にし、『マルタ島のユダヤ人』を活用して劇に着手し、1596 年頃、『ヴェニスの商人』を創作したと考えられています。

神父様は、『ヴェニスの商人』も行間を読む必要があり、行間を読むと別の解釈が生まれると説明されました。当時のロンドンにはユダヤ人の数が少ないうえ、ユダヤ人シャイロックが、旧約聖書のみならず新約聖書を熟知している点を考慮すると、実際は、ユダヤ人を描いたのではなく、演劇とカトリックを敵視するピューリタンを描いた可能性を示唆されています。

第二部の質疑応答：

質問 1：第四幕第一場の法廷の場面で、弁護士に男装したポーシャが、公爵に「どちらが商人で、

どちらがユダヤ人でしょうか？」と質問するセリフに関して。外観からも服装からも、明らかに両者の違いが明確であるにもかかわらず、なぜ、ポーシャは、二人を確認する質問を敢えて行ったのでしょうか？シェイクスピアの隠れた意図を伺いました。

お答え：神父様は、外見からヴェニス商人とユダヤ人の見分けがついたにせよ、裁判の形式に則って本人確認をしたのだと説明されました。この質問に加えて、その直後のセリフの詩形に触れたご説明がございました。

Portia : Which is the merchant here, and which the Jew?

Duke : Antonio and old Shylock, both stand forth. (第四幕第一場)

シェイクスピアは、“iambic pentameter” (弱強五歩格)の詩形を整えるために、シャイロックの名前の前に“old”を加えています。

質問 2：ユダヤ人シャイロックは、悪役と解釈されてきましたが、第二次世界大戦中のホロコースト以来、シャイロックを人種差別の犠牲者、悲劇的ユダヤ人ととらえる傾向がみられます。

シェイクスピアは、シャイロックをどのように捉えていたのでしょうか？

お答え：シェイクスピアはユダヤ人差別をしてはいません。シャイロックは、人種差別の被害者であると同時に、アントーニオの命を狙う復讐者です。シェイクスピアはシャイロックを人間として描いているとのお答えでございました。補足的な説明として、ドイツを逃れた多くのユダヤ人が学問、ジャーナリズム、映画製作の分野で活躍しているため、作品解釈の判断のバランスが幾分崩れている点を指摘されました。

お話の最後に、『ヴェニスの商人』が喜劇か悲劇かに関しては、皆様の判断にお任せしますとおっしゃいました。

慣例に従い、ポーシャのセリフ“The quality of mercy is not strained...”と、シャイロックのセリフ“Hath not a Jew eyes?...”の名セリフを全員で朗読し、春期講座第一回が終了いたしました。